
I S -

ニ-りん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

IS -

【ZZード】

ZZ866Y

【作者名】

じーりん

【あらすじ】

ただの高校生で、ただの人だった少年の、夢の中の話、でも夢の中だけの話では收まらなかつた。

俺は見ていた、いつも見る夢だ。

それは俺が『蝶』になる夢。

そして見る夢と言えば、『戦争』だ。

人が、『主に』女性がパワードースツの様なものを付けて戦つている。

何故『主に』と言つたかと言つと、一人だけいたんだ、いつも一人女性達の中で一緒になつて戦つている『一人の少年』が。

「大丈夫か！？ 築！！」

「私の心配より自分の心配をしろ！」

『白い少年』と『紅い少女』はいつも戦いの中で互いを心配しあつも喧嘩をしていた。

俺はと言うと呆れて何も言えない、そもそも夢の中での俺は蝶なので何も言えないが。

ただ、そこで見る夢は『嫌にリアル』だった・・・。

もしかしたらコレは

俺が蝶になつた夢を見てるんじゃなくて

蝶が『俺』になつた夢から覚めた時に見て居るものなのかも知れない

でも、いつも通り田を覚ますと、俺は、『人』だった。

蝶（後書き）

なんか適当に行ぐつス、長つたらしくさう行くか、パパツつと
行くかはそこんとこも適当で。

夢（前書き）

あさひのす

夢

夢から覚めたは良いが折角の休みだと言つのに・・・はあ。

【6月12日土曜日 時刻5:57 晴れ】

「まったく、あの夢にも困ったもんだな・・・」

あの夢を見ると何故か不安な気持ちになる、なんていうか、胸の中をぐるぐる何かが渦巻いてるような感覚だ、慣れていたつもりなんだけど、ひつしてまたあの夢を見てみるとやっぱり駄目だな。

「おーい！ 慎一！ 起きてるか――！」

一階から声がする、ふと時計を見ると、

「マジかよ・・・」

【6月12日 時刻7:41 晴れ】

要するに俺は1時間以上ベットの上でボーッとしていたわけだ、まったく自分に呆れるよ。

「なんだ起きてたのか」

「久々にさ・・・」

「また、あの夢か？」

「ああ・・・」

「やうか

「それで?」

「ん?」

「なんか用事があつたんじゃねえの?」

「ああ、やうだつた、健悟、来てるやで」

俺は私服に着替えて一階のリビングに入りついた声が聞こえた。

「いや~、本当に見ても美代子さんて綺麗ですよ~ね~」

「お前毎回会うたびにそれ言つよなあー」

「だつて本当の事じゃないですか!」

「まあ、たしかにな!それに悪い気分じゃないしな

またか・・・・・・。

あいつの名前は、花形 健悟、俺が生まれたときからの腐れ縁野郎
2号だ。

あいつは俺に家に来るといつも俺の姉、櫻田 美代子、こちよつかいを出す。

まあでも、姉ちゃんも姉御肌つてやつだからだろ？か、結構いろんな人から慕われてたりするそうだ、それに姉ちゃんは弟の俺が言うのもなんだけど、スゲー美人だつたりする、そのせいで俺は学校のヤツらに写真撮つて来いだの、羨ましいだのメンドくさいつたらありやしない・・・・・・はあ。

ガチャツ

「またか、この野郎」

「悪いが、この野郎」

「で、なんだよ？」

「あいつも誘つてどつか行こひづせー。」

「いいけど、どこ行くの？」

「決めてねえ！――」

「またかよ・・・・」

「これもいつものパターンだ、健悟が俺に家に来て「どつか行くぞ！」と言つけどいつも行き先は決まっていない、行き当たりバッタリつてヤツだな。

そして健悟が言つた『あいつ』つてのは草野くやのアリシア、俺が生まれたときからの腐れ縁野郎1号だ、野郎つて言つても女の子だけどな、あと名前から見てもわかるようにハーフだ。

「美代子さんも一緒に遊びですか？！」

「私は忙しいからバスだ」

「遊びや公園遊びしてただけだろ」

「公園あるの嬉しいこ

「だつてよ」

「ですよねー」

「さて、行くか

【6月12日土曜日 時刻9：38 晴れ】

ピンポーン

「アリシアー！野球しようぜーーーお前ボールなーーー！」

「そんなこと言つてるとまた

「誰がボールだクソ健悟おおおおおおーーーー！」

「グハアアアアアアアアアアーーーー！」

・・・これもパターンだ、健悟がアリシアの家の前でくだらない事を言い、アリシアが健悟をぶん殴る、お前らをすがだわ。

「眞ちやんがめつて一今口がいりへるべ

「たぬ」

「まあお決まりだよね~」

【6月12日土曜日 時刻1:26 晴れ】

「眞ざうある?」

「私ねえ、慎ちゃんの好きなものが食べたいー。」

「なあなあ！俺ラーメン食いたい！！」

「うーん！ 健悟黙ってろ！！ お前には聞いてない！！」

「じゃあ、ハーマンで」

「そ、うだよ、ね！ ラーメンが、良、いよ、ねーーー！」

「おい」

まあなんだ、カウンター席でラーメン食べるわけだが、何故隣の席に姉ちゃんがいるんだ？

「まあ、いいではないか弟よ」

「」の人生問題だよ。

【6月12日土曜日 時刻5:52 晴れ】

「帰るか」

「ああ」

「そだね」

「やつだな」

・・・・・なんか今一人多かつたぞ。

「点呼を取る、1番」

「2番」

「「3番」」

ダブつた。

「おー、姉ちゃん」

「なんだ」

「何故いの」

「知らん」

またパターンだ、俺たちで何処かに出かけるといつの間にか姉ちゃんがいる。

「A M A I」

【6月12日土曜日 時刻11：28 晴れ】

今日もあの夢見るのかな、疲れるからあまり見たいとは思わないんだけど、しかもいつも途切れ途切れで、漫画で言うと間の1巻が抜けてる感じだ。

「寝るか・・・」

【6月13日日曜日 時刻3：21 雨】

イ

『シン、早ク来テ、デナイト、私ハ、飛ベナ

夢（後書き）

The 適当……いやまあ、一応考えていますけど完全にその場のノリとかで書いてます。

戸と剣（前書き）

意味ないです。あとセリフばかりです。あとぬいがや好き勝手にやつてます。

月と劍

【6月12日 土曜日 時刻PM7:36 晴れ】

その日、俺は慎やアリシアといつものように遊びいつものように帰つてきた、だけど違う、何故か凄まじい眠気に襲われて、俺はそのままベッドで眠りに付いた。

俺はあまり『夢』というのを見ないタイプだった、だがその日は違つた、俺は見たんだ、『月』を。

【6月14日 月曜日 時刻AM6:24 曇り】

学校

「なあ、慎~」

俺は久々に見た夢のことを慎に言おうと思つた。

「なんだよ」

「久々にさ、『夢』を見たんだよ」

慎の顔を見ると少し驚いたような顔をしていた。

「健悟が夢を見るなんてめずらしいな、前は『お前ばかり夢見て

『すりへ～！』とか言ってたのに

「そりなんだよなあー、しかもその夢がまた不思議でさ、ただ俺が『月』に立ってるだけなんだよ、そりにおかしなことに、その月にはさ、巨大な施設があつたんだ」

施設？

「ああ、なんかでかいアンテナのある施設」

一
へ
え
」

あの夢は本当何なんだろうか・・・・・・・・・・・・

【6月12日 土曜日 時刻PM12:57
雨】

『 』

• • • ! ! • • • • • • • • • • • • • • •

……………

……………

「うわあ…………！」

はあはあはあ…………今の『夢』…………なんだつたんだろ…………ものすごくリアルだつたな…………。

「慎起きてるかな…………」

プルルルルルルル…………プルルルルルルル…………

「出ない…………」

こんな時間に慎が起きてるわけないか…………

その1ヵ月後、三人の死体がそれぞれの自宅から発見された。

月と剣（後書き）

どうですかね？意味フですよね、ジ都合主義つてヤツですかね。

たぶんこんなにテンション高くないし明るい話じゃないですW

長いです、わけわかんねーです。

目が覚めたらそこは知らない場所で、知らない人の顔が覗きここんでいた。

「こ」は何所のなだらうか。

「目が覚めたか」

「よかつたですね~」

黒髪の女性が俺に話しかけてきて、優しげな顔の女性が安堵していた。

「自分の名前がわかるか?」

名前を聞かれた、ふむ、どうやら自分のことはわかる。

「櫻田慎・・・」

「そうか、ならそいつの2人の名前も知っているか?」

2人?と思いつら見ると、健悟とアリシアがいた。

「・・・男の方が花形健悟^{はながたけんご}、で、女の方が草野アリシア(くさの)」

内心俺は「なんでお前らいんの?」つてなつてたけど顔には出さない、もう一度いうけど顔には出さない、なので男の俺はジト目なんではないんだ、してないんだ。

「なんだその顔は？」

「うつやら顔に出でたよつだ。

「なんでもないです・・・」

「じいが何所かもわかつてないのに俺は意外と平常心だった、自分が自分で謎だな。

「ふむ、名乗るのが遅くなつたな、私は織斑千冬^{おとしむちかず}、『HIBI学園』で教師をしている」

女性が名乗るが気になつたのはじいではない、『HIBI学園』やつ『IS』だ。

「あの、HIBI学園ってなんですか？」

「HIBI学園をしらないんですか？」

じいに話しかけてきたのは先ほどの優しそうな顔の女性だ。

「あのHIBI園って・・・」

「あつ、申し送れました、私は山田真耶^{やまだまや}です、織斑先生と同じでここで教師をしています」

そのあと山田真耶さんによつてHIBIを説明された、このHIBIとこうのじいのじいに俺が夢で見たものと似ていふよつだ、もしかして夢のよつてはならなつよな・・・。

「わかりましたか？」

「あ、ああ・・・はい」

「でも、変ですね、ISを知らないなんて」

「そうなんですか？」

「そうですよ、さつきも言いましたけどISは今や世界で仕様されています、なので男性だからといって知らないというのは」

そうだったのか、じゃあ俺は完全に不審者じゃないのか？

「ISを知らぬ者がISを持つ・・・か」

不意に黒髪の女性、織斑千冬さんとか言ったが、その人がつぶやいた。

「どうしたんですか、織斑先生？」

「「む、コレはお前たちのだな」

そう言いながら織斑千冬さんが見せてきたのは俺が高校の入学祝いに姉さんから貰つた蝶のアクセサリーに健悟の銀のブレスレット、そしてアリシアの赤い指輪、みんな毎日付けていたのでよく憶えている。

「あ、それは・・・」

「どうやら間違になつたんだな

「たしかにそれはオレ達のですけど、それがどうかしたんですか？」

「先ほど『れいはー』と判断された

は？

いやいや、まてよ、それは俺達が前々から持つてたもので、それが『れいはー』なわけがないじゃねえか、そんな馬鹿げた話聞いたことが無い。ここが別の世界なのはわかつた、もちろんそれにも驚きはしたがそもそも前の世界から持つっていた物が『れいはー』にかわるなんてのは話が別だろ。

「信じられな」ようだが、これは真実だ

「は、はあ・・・」

全くもつて信じられんがこれが現実らしい。

姉さんに貰つたものが『れいはー』になつちまつた。

「それでは昨日入学式をしたばかりですけど、今日は3人の転校生を紹介しちゃうかしします」

俺たちは今IIS学園の1年1組の教室の前で待たされていた、何故かつて？それはな・・・

「それでは3人共入ってきてくださいーーー！」

そういうわけだ。

そして教室に入る俺達3人。

「では自己紹介してください」

「櫻田慎です、二人目のIIS操縦者ですが何分IISのことには疎いのでその辺は大目に見てください、それでは本日よりよろしくお願ひします」

歓声、と、いうより騒音、が上がる、平常心平常心、笑顔笑顔、うん、無理。

続いて健悟が自己紹介をする。

「花形健悟です！俺もIISについてはよくわかんねえからみんなが教えてくれると嬉しいかな！」

と超キメ顔で言つ、こいつは何所に行つてもかわらないうだ。

もちろん健悟のときにも歓声（騒音）は上がる、それを聞いて健悟は「俺ここだといけんじゃね？」など囁いてくるが無視する。

そして最後にアリシア。

「えっと、私は草野アリシアって言います、えっと、実は最近なつてE.Sの事を知りました、なので私にも色々教えてくれると嬉しいかな」

歓声（騒音）はなく女子達の「かわいい」と言つのがよく聞こえた、そして、最前列の真ん中の生徒（男）が「おおー・・・」と言つていたのはたしかだった。

「ではあなた達3人の席はあそこです」

と、山田真耶さん（今は山田先生か）が俺達の席を指す、そこは窓儀はから横に3席、しかも最後の列だ。

俺達が席に座ると、織斑千冬さん（彼女も今は織斑先生だな）が話はじめる。

「それでは再来週行われるクラス対抗戦に出る代表者を決める

なんだそれ？まあ俺達は関係なさそうだからいつか。

「クラス代表とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席・・・まあ、クラス長だな。因みにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点では大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりでいる」

「はい！私は織斑くんを推薦します！」

「え、俺！？」

と言ひながら先ほどの少年（俺が言つのもあんだが）が立ち上がり驚いている、あると。

「座れ織斑、邪魔だ」

今氣が付いたが彼も織斑といつらしき、織斑先生に聞かされていた弟といつのはあいつのことりしき、何故氣が付かなかつた俺・・・。

「私は櫻田くんがいいと思ひます！..」

「なー？俺もか！」

俺までもか！ならば！..

「俺は花形くんがいいと思ひます！..」

「おひてめえ慎ふぞけんな！..」

「残念だつたなてめえも道ずれだ」

フツフツフ、俺だけなんてもつてのほかだぜ、お前のも苦しんでも

らひづせ健悟。（大げさ）

「なら俺は草野さんがいいと重いまーす！..」

「てめえ健悟！..」

そう言いながら健悟の胸倉をつかむアリシア、それを見たクラスメイト達と教師陣は唖然とした顔をしていた。

「ボソツ（アリシア、アリシア）」

「はつー。」

そのあと健悟の胸倉離し顔を赤くして席に静かに座る、健悟相手だとアリシアは性格かわるからな。

「他にいないのか？ いないならこのまま投票で決めるぞ」

「納得いきませんわーー！」

すると金髪のいかにもお嬢様って感じの女の子が大声を上げる。

「そのような選出認められません！ 大体実力から行けばこのわたくしが代表に選出されるのは必然ですが、物珍しいという理由で運だけの男が選ばれるなど論外ですわ！ そんな屈辱の一年間をわたくしに味わえとおっしゃるんですか」

これ完全に俺達のことじやねえか、まあ確かによくも知らないやつらをクラス代表なんかにしたくはないよな。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないと自体、わたくしにとつては」

「イギリスだつて大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

織斑くん君も言つねえ、君達もつと穩便に行つよ、おじちゃんもう申し訳なさすぎて泣けてきたよ。

「いいぞ織斑弟——もつと言ひてやれ——！」

ガシツ——！

そこで俺は健悟のこめかみを掴みアイアンクローをする、黙つてろ
健悟。

「あ、貴方、わたくしの祖国を侮辱するのですか！——これから日本
本つて言つのは——！」

その後も織斑先生の弟と金髪お嬢様の口論は続む。

「け・・・」

「け？」

「決闘ですわ——！」

「ああ、ここせ、やつてやるよ」

「そちらの方々もですわよ——！」

「俺達もですか・・・」

何故か俺達までもがその決闘とやら参加をせりれる様だ。

「うこうう子苦手なんだよなあ・・・。」

「言つておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い
いいえ、奴隸にしますわよ」

「ああ、いいぜ。小間使いでも奴隸でも何にでもなつてやるよ。」

折角だから適当に負けよつかと考えていたら案の定だつた、わざと
負けると奴隸にされるらしい、この子の頭の中はどうなつてゐるのか
知りたい、そして織斑先生の弟よ、君大丈夫なのか・・・? 。

「なあなあ、慎」

そんなことを考えてゐると健悟のやつが小声で話しかけてきた。

「俺なんか目覚めそななんだけど、じつじつ・・・・・・」

「もつこいつの事は知らん。

「あなた達もいいですわね!・・・・・・」

「ああ、もうなんでもいいよ・・・・・・」

「俺はいいぜ!大賛成だ!・・・・・・」

「え、私も?」

「さて、話はまとまつたようだな。それでは勝負は次の月曜日。放
課後、第三アリーナで行つ。織斑・オルコット・櫻田・花形・草野
はそれぞれ用意をしておくよつと。それでは授業を始める」

次の日曜日ね、対戦方式はどうなるんだりつか、まあ当面になればわかる話しだな。

「あれ？私はなんで無視されてるの？あれあれ？」

なんかアレつすよね。（・・）

まあでも読んで下さってありがとうございます！」わざわざ！
次回もお楽しみに……ヽ(。 。)ヽ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9866y/>

IS -

2011年12月25日20時53分発行